



Title	南琉球八重山黒島方言におけるテンス・アスペクト・エビデンシャルティー接尾辞jassuの記述的研究
Author(s)	原田, 走一郎
Citation	阪大日本語研究. 2015, 27, p. 59-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51522
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

南琉球八重山黒島方言における
テンス・アスペクト・エビデンシャルティー接尾辞 *jassu* の
記述的研究

A descriptive study of the tense-aspect-evidentiality suffix *jassu*
in Kuroshima Ryukyuan

原田 走一郎
HARADA Soichiro

キーワード：琉球語、黒島方言、テンス、アスペクト、エビデンシャルティー

要旨

本稿では、南琉球八重山黒島方言におけるテンス・アスペクト・エビデンシャルティー接尾辞 *jassu* の形式的記述、および意味的記述を行う。この接尾辞は、主節末に生起しうるものの、時制接尾辞とは共起しない、という点において形態統語的に特徴的である。さらに、連体修飾節末には生起することもできない。意味的には、「直前に話者が直接経験した状況の変化」をあらわす。つまり、発話時との時間的關係、情報の出所、事態の局面を同時にあらわしており、テンス、アスペクト、エビデンシャルティーが重なる接尾辞である、と言える。

1. はじめに

南琉球八重山黒島方言（以下、黒島方言とする）には、以下のように使用される接尾辞 *jassu* [jas:u] がある（以下の例文では *ijassu* という異形態をとっている）。この例文は、単純に日本語訳すると、下に示したとおり、「実が落ちた」となる。

- (1) *nannu*¹⁾ *utijassu*
 nar=nu *ut-jassu*
 実=NOM 落ちる *-jassu*
 実が落ちた

もちろん、上記の例文に似た意味をあらわすために、*jassu* ではなく、過去をあらわす接尾辞を用いることもできる。

- (2) *nannu* *utita*
 nar=nu *ut-ita*
 実=NOM 落ちる *-PST*
 実が落ちた

しかし、同じ状況で発話可能であるとはいえ、これら2つの文がまったく同じことをあらわしているわけではない。(1)の例文は、発話の直前に話者が木の実が落ちるところを自身で直接知覚した場合にしか用いることができない。本稿では、黒島方言におけるこのような直前に話者が直接経験した状況の変化をあらわす接尾辞jassuの形態統語的、意味的記述を目的とする。

結論を先に述べると、jassuは以下の特徴を持つとすることができる。

(i) a. 形態統語的特徴：①義務接尾辞である

②時制接尾辞と共起しない

③主節末、副詞節末には生起するものの、
連体修飾節末には生起しない

b. 意味的特徴：直前に話者が直接経験した状況の変化をあらわす

したがって本稿では、jassuはテンス、アスペクト、エビデンシャリティーが重なりあった形式である、と考える。

本稿の流れをここで述べる。まず2節において黒島方言の概要を述べる。続く3節においては、jassuの形態統語的特徴について述べる。そして4節においては、jassuの意味的特徴を述べる。5節は本稿のまとめであり、あわせて今後の課題も述べる。

2. 黒島方言の概要

本節では黒島方言の概要を簡単に述べる。まず2.1において黒島方言の言語状況について、続く2.2においては音韻、2.3においてはテンス・アスペクトの概要を示す。

2.1. 黒島方言の言語状況

黒島方言は、沖縄県八重山郡竹富町黒島において使用されている。この島は、八重山地方の中心である石垣島から高速船で南西へ約30分行ったところにある、周囲10kmほどの小さな島である(図1を参照のこと²⁾)。島内には、5つの集落(保里、伊古、東筋、仲本、宮里)があるが、このうち、保里、東筋、仲本の3つのコミュニティでのみ本稿が対象とする伝統的な黒島方言が使用されている³⁾。なお、これらの3集落間には多少方言差があるが、本稿においては特に区別せず、まとめて黒島方言として扱う。

系統としては、琉球諸語の南琉球語、さらにその下位区分である八重山方言群に属する。ただし、近隣の方言との相互理解はほばないようである。八重山方言群の系統についてはローレンス(2000)に詳しい。

黒島方言は、ほぼ75歳以上の話者のみがこれを使用する能力をもっている。2010年の国勢調

査によると、黒島の当時の65歳以上人口が53名であるため（沖縄県八重山支庁（2012）『八重山要覧』参照）、2014年現在、40名前後の話者がいるものと推測される。しかし、この話者の子供世代は理解能力はあるものの、使用能力は持たず、この方言の継承はなされていない。したがって、この方言は消滅の危機に直面している。

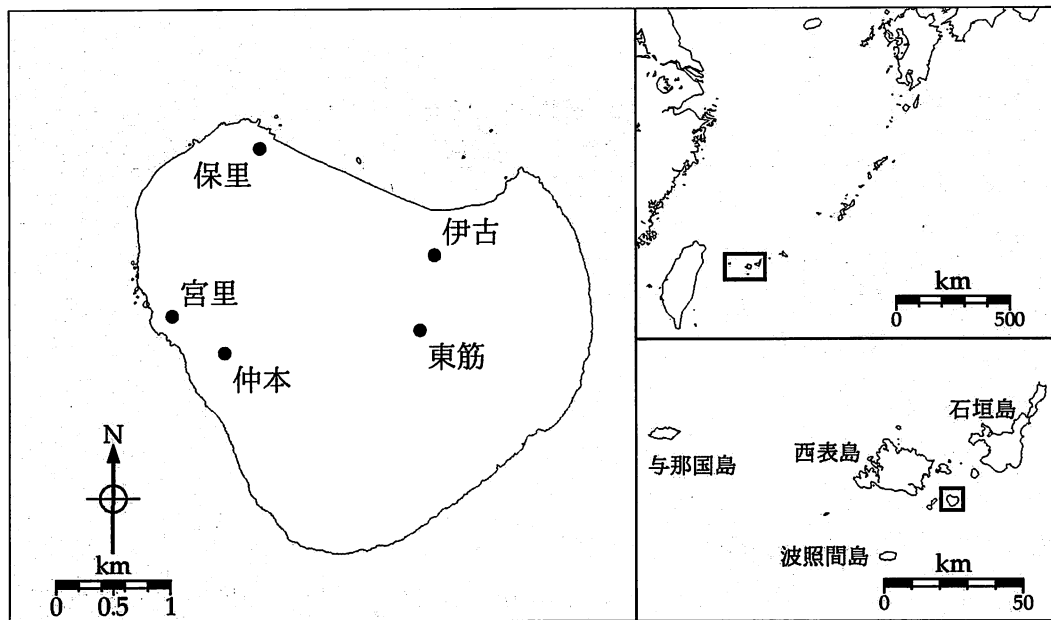


図1 黒島の地理

2.2. 音韻の概要

本節においては黒島方言の音韻の概要を述べる。

黒島方言の音素目録は以下のとおりである。15の子音、2つの半母音、5つの母音を認める。なお、長母音は同じ母音の連続と見なす。基本的な音節構造は (C) (C) (S) V (V) (C) である。

表1 黒島方言の母音

	前舌	奥舌
狭	i	u
半狭	e	o
広	a	

半母音：j、w

表2 黒島方言の子音

		両唇	唇歯	歯茎	軟口蓋	声門
破裂音	無声	p		t	k	
	有声	b		d	g	
破擦音	無声			c		
摩擦音	無声		f	s		h
	有声		v	z		
はじき音				r		
鼻音		m		n		

2.3. テンス・アスペクトの概要

本節においては、まず本稿で扱う jassu を除いた範囲での黒島方言動詞のテンスおよびアスペクトについて簡単に概要を述べる。テンス、アスペクトに関する調査は現在も進行中であるため、以下は現在わかっている範囲での記述である。その後、これらと比較しつつ、jassu の特徴について簡単にまとめる。

まず、黒島方言のテンスは過去と非過去の対立を持つ。これらは動詞の義務接尾辞において示され、範列的に対立している。（義務接尾辞と任意接尾辞については、3 節において詳述する。）

(3) テンスの形態的対立

- a. 非過去 jum-u
読む -NPST
- b. 過去 jum-uta
読む -PST

このように、テンスが形態的にも対立しているのに対し、アスペクトは形式の上で体系的とは言えない。現在わかっている限り、アスペクトをあらわす形式は助動詞と任意接尾辞であらわされるものが主である。以下、簡単に形式とそれがあらわす意味をまとめる。なお、これら

の形式はすべて、上に述べたテンスの対立を持つ。

(4) アスペクトにかかわる主な形式とそれがあらわす意味

- a. 進行 助動詞 bur
- | | | |
|------------|--------|---------|
| ubuhazi=nu | ki-i | bur-Ø |
| 台風=NOM | 来る-INF | 進行-NPST |
- 台風が来ている
(接近中である。まだ台風は直撃していない)
- b. 完了(痕跡あり) 任意接尾辞 ee
- | | |
|------------|------------|
| ubuhazi=nu | k-ee-Ø |
| 台風=NOM | 来る-完了-NPST |
- 台風が来ている
(台風直撃中と、それ以降。なんらかの痕跡がある)
- c. 完了(痕跡無関係) 任意接尾辞 ida
- | | |
|------------|------------|
| ubuhazi=nu | ki-ida-Ø |
| 台風=NOM | 来る-完了-NPST |
- 台風が来ている
(台風直撃中と、それ以降。痕跡に関しては無関係)

上に示したアスペクト的意味について簡単に説明を加えておく。痕跡のありなしが問題となる場合がある。台風の例を用いると、たとえば、木が倒れているなど、台風の痕跡が発話時点まで残っている場合に ee が使用可能である。逆に、ida のほうは特にそのような制限はない。以下にそれぞれの例を示す。

(5) a. ee の例

(前の週に台風が来て、いまだに倒木が片付けられていない。)

sensjuu	ubuhazi=nu=du	k-ee-Ø
先週	台風=NOM=FOC	来る-完了-NPST

先週、台風が来た

b. ida の例

(前の週に台風が来た。)

sensjuu	ubuhazi=nu=du	ki-ida-Ø
先週	台風=NOM=FOC	来る-完了-NPST

先週台風が来た

このようなテンス、アスペクトにかかわる形式を持つ黒島方言であるが、これらに対して本

稿で扱う jassu は大きく異なる性質を持つ。それは、以下のようなものである。

(ii) jassu の諸特徴

1. アスペクトにかかわる形式であるにもかかわらず、義務接尾辞である
2. 形態的にテンスの対立がない
3. 意味的には、上にあげた形式には無関係である話者の直接経験がかかわる

のちに 4.2 において詳述するが、話者の直接経験が意味的に必須であるため、jassu を用いて未来のできごとをあらわすことは不可能である。実際、エビデンシャリティーをあらわす形式を持ついかなる言語においても過去のことを述べるエビデンシャリティー形式のほうがそれ以外の時制のエビデンシャリティー形式より多く存在するようである (Aikhenvald 2004: 261)。

以下、このような jassu の諸特徴について詳述する。

3. jassu の形態統語的特徴

本節では、jassu の形態統語的特徴について述べる。具体的には以下の点を述べる ((i-a) を再掲)。

(i) a. jassu の形態統語的特徴

- ① 義務接尾辞である
- ② 時制接尾辞と共起しない
- ③ 主節末、副詞節末には生起するものの、連体修飾節末には生起しない

これらの特徴は形態と統語がともに関係するところであるが、(i) ①と②について形態的特徴として 3.1. において、(i) ③については統語的特徴として 3.2. において述べる。

なお、jassu は形容詞、名詞、コピュラには後接しない。

3.1. 形態的特徴

本節では、jassu の形態的特徴について述べる⁴⁾。具体的には、jassu は義務接尾辞であること、また、時制接尾辞と共起しないことを述べる。

まず、jassu が義務接尾辞である、という点から述べていく。そもそも、黒島方言の動詞には接尾辞しか見つかっていない。jassu も同じく接尾辞である。

- (6) [ut -jassu]
 落ちる -jassu
 [語根 -接尾辞]_{動詞}
 落ちた

(7) *jassu-ut

黒島方言の動詞は語根と接尾辞からなる。接尾辞は、必ずとる必要のある義務接尾辞と、任意の任意接尾辞に分類される。義務接尾辞をとらなければ、動詞は文中のどの位置にも生起することができない。したがって、最小の動詞は「語根＋義務接尾辞」という構成のものである。そのため、黒島方言の動詞について、最も単純化して図式化すると、以下のような構造をとるものであると言える。例を示す。

(8) 黒島方言動詞の基本構造

[語根 (- 任意接尾辞) - 義務接尾辞 (- 任意接尾辞)]_{動詞}

(9) 動詞の例 (義務的要素に下線を付している)⁵⁾

- a. jum -uta
 読む PST
 語根 義務
 読んだ (主節末も連体修飾節末も可能)
- b. jum -ar -ita
 読む PASS PST
 語根 任意 義務
 読まれた (主節末も連体修飾節末も可能)
- c. jum -ar -ita -n
 読む PASS PST IND
 語根 任意 義務 任意
 読まれた (主節末のみ)
- d. jum -ar -ita -ru
 読む PASS PST ADN
 語根 任意 義務 連体
 読まれた (連体修飾節末のみ)

ここで、本稿で問題にしている jassu について確認する。jassu は直前に動詞語根を、直後に終助詞をとることができる形式である。そのため、義務接尾辞とするのが妥当であると考え。これは、終助詞が動詞に後接する場合、義務接尾辞をとったあとのかたちにしか後接しえないためである。(10) には典型的な義務接尾辞である時制接尾辞をとり、そのうえで終助詞をとった例を示す。これに対し、続く (11) においては義務接尾辞をとっていないために終助詞が後接しえない例を示す。

- (10) jum -uta =waja
 読む PST SF
 語根 義務
 読んだよ
- (11) *jum -ar =waja
 読む PASS SF
 語根 任意
- (12) jum -jassu =waja
 読む jassu SF
 語根 義務
 読んだよ

ここで、jassu と時制接尾辞との関係について述べる。通常、黒島方言において主節末に生起することができる動詞は、命令や勧誘などの対人的モダリティ要素もしくは時制接尾辞を含んでいる。そして、仮に jassu が「直前に話者が直接経験した状況の変化」という意味を持つのであれば、過去の接尾辞をとってもいいはずである。しかし実際は、jassu は過去の接尾辞と共起しない。

- (13) *ut-ijassu-ta
 (14) *ut-ijass-ta
 (15) *ut-ita-jassu

このように、jassu のあとにも ((13))、jassu の末尾の u が非過去の接辞の異形態と同音であるためそれを除いたかたちに仮に続けても ((14))、また、jassu の前にも ((15)) 過去の接辞をとることはできない。

また、非過去接尾辞をとることもない。これについても上と同様に、jassu にさらに非過去の接辞の異形態をそれぞれ付した場合 ((16) と (17))、非過去の接辞に jassu を続けた場合 ((18)) を示しておく。

- (16) *ut-ijassu-iru
 (17) *ut-ijassu-u
 (18) *ut-iru-jassu

黒島方言動詞の非過去接尾辞は u (異形態として iru も) であり、jassu は末尾にこの接尾辞と同じ母音を持つものの、過去との対立がない以上、これを非過去の接尾辞として分析することはできない。歴史的に jassu の u が非過去接尾辞に由来する可能性はあるものの、共時的には jassu をこれ以上小さな形態素に分析することは適切ではない。このように、jassu を含む動詞

は主節末に生起可能であるものの、時制接尾辞と共起しない珍しい形式である。このことについては次節で詳述する。

以上、本節では、jassuは義務接尾辞であること、時制接尾辞とは共起しないことを述べた。

3.2. 統語的特徴

本節ではjassuを含む動詞の統語的特徴について述べる。具体的には、jassuを含む動詞は連体修飾節末には生起しえないこと、また、時制接尾辞を持たないにもかかわらず主節末に生起可能である例外的な形式であること、の2点を述べる。

まず、jassuを含む動詞が連体修飾節末には生起しえないことを述べるが、その前に、通常の時制接尾辞の生起可能な統語的環境について述べておく。時制接尾辞をふくむ動詞は、主節末、副詞節末、連体修飾節末に生起する。

(19) 時制接尾辞を含む動詞の統語的環境

a. 主節末

kis-uta=do
 着る -PST=SF
 着たよ

b. 副詞節末

kisaa	kin=ba	kis-uta=nu	mee	paz-uta
さっき	着物=ACC	着る -PST=逆接	もう	脱ぐ -PST

さっき着物を着たけどもう脱いだ

c. 連体修飾節末

kin=ba	kis-uta	pusu
着物=ACC	着る -PST	人

着物を着た人

これに対し、jassuを含む動詞は主節末、一部の副詞節末には生起するものの、連体修飾節末には生起することができない。なお、jassuが生起可能な副詞節は今のところ(20-b-1)に示す逆接の助詞nuを用いたものしか確認されておらず、他の副詞節では非文法的とされる。

(20) jassuを含む動詞の統語的環境

a. 主節末

kis-jassu=do

着る-jassu=sf

着たよ

b-1. 副詞節末（逆接）

kisaa	kin=ba	kis-jassu=nu	mee	paz-jassu
さっき	着物=ACC	着る-jassu=逆接	もう	脱ぐ-jassu

さっき着物を着たけどもう脱いだ

b-2. 副詞節末（理由）

*kisaa	kin=ba	kis-jassu=junti
さっき	着物=ACC	着る-jassu=理由

さっき着物を着たから

b-3. 副詞節末（起点）

*kisaa	kin=ba	kis-jassu=hara
さっき	着物=ACC	着る-jassu=ABL

さっき着物を着てから

c-1. 連体修飾節末（内の関係：主語がヘッド）

*maruma	kin=ba	kis-jassu	pusu
今	着物=ACC	着る-jassu	人

今、着物を着た人

c-2. 連体修飾節末（内の関係：目的語がヘッド）

*maruma	kis-jassu	kin
今	着る-jassu	着物

今着た着物

c-3. 連体修飾節末（外の関係）

*kin=ba	kis-jassu	bason
着物=ACC	着る-jassu	とき

着物を着た時

このように、「いくら直前に話者が直接経験した変化」であっても連体修飾節にjassuを含む動詞がたつことは不可能である。ここまで、jassuの統語的特徴の1つである、連体修飾節に生起不可能、という点について述べた。

続いて、時制辞と共起しないにもかかわらず、主節末に立ちうるという点の特異性について述べる。通常、主節末に生起できるかたちをつくる接尾辞は時制接尾辞か命令や勧誘などの対人的モダリティをあらわす接尾辞かに限られる。

- (21) jum -u =waja
 読む NPST SF
 読むよ

- (22) jum -i =juu
 読む IMP SF
 読んでくださいよ

しかし、上述したとおり、jassu は主節末に生起しうる。そして、jassu は命令や勧誘などといった対人的モダリティをあらわす形式ではない。このようなことから、jassu は時制接尾辞をとることが予想されるが、実際は前節で示したとおり、そうではない。つまり、jassu は、主節末に生起する命令や勧誘などの対人的モダリティをあらわさない形式としてはテンスを持たない、黒島方言においては例外的な形式なのである。

このように、本稿では jassu を例外的な形式として考えているが、もうひとつの考え方としては、jassu そのものを時制接尾辞としてとらえるということも考えられる。つまり、黒島方言動詞の時制は過去、直前、非過去の3つであるとすることも不可能ではない。実際、対人的モダリティを持たない主節末に生起可能な義務接尾辞であるということは、この接尾辞が時制辞である可能性を示している。しかし、本稿ではそのようには考えない。それは、以下の理由による。

(iii) jassu を時制接尾辞と考える理由

①動詞に制限がある

②統語的な生起環境に制限がある

まず、動詞の制限について述べる。他の時制接尾辞は、存在動詞語根にも後接可能であるが、jassu は存在動詞語根には後接不可能である。

- (23) a. ar-ta b. *ar-jassu
 ある-PST
 あった

さらに、上に述べたとおり ((20))、統語的な制限がある。時制接尾辞は連体修飾節末にも生起可能であるのに対し、jassu を含む動詞は連体修飾節末には生起不可能である。

これらのことから、jassu を時制接尾辞と考えることはせず、時制接尾辞とはならないものの、例外的に主節末にたつことのできる接尾辞であると考ええる。

これまでに述べた jassu の形態統語的特徴を 2 節で述べた他のテンス、アスペクト形式と比べると、特徴が際立つ。まず、jassu はアスペクトにかかわる形式であるのに、時制の対立がない。さらに、それ自身が義務接尾辞である。主節末に生じうる対人的モダリティをあらわさない義務接尾辞は jassu 以外には時制接尾辞しか見つかっていない。したがって、このことは jassu を時制接尾辞として認めてよい、という可能性を示している。しかし、上に述べたような理由で jassu を時制接尾辞として認めることはしない。これらの jassu の諸特徴は他のテンス、アスペクト形式とはまったく共有されていないため、jassu は黒島方言動詞のテンス、アスペクトの体系のなかでは例外的な形式である、と言わざるを得ない。以上、本節においては jassu の形態統語的特徴について述べた。

4. jassu の意味的特徴

本節では、jassu の意味的特徴について述べる。jassu は、以下のような意味を持つと考えられる ((i-b) を再掲)。

(i-b) jassu の意味的特徴：直前に話者が直接経験した状況の変化をあらわす

以下では、上記の意味的記述をいくつかの部分にわけて、それぞれ説明していく。4.1. では「直前」という点について、4.2. では、「話者の直接的経験」という点について、そして 4.3. では「状況の変化」という点についてそれぞれ述べる。

4.1. 「直前」

本節では、jassu のもつ意味として考えられる「直前」について考える。jassu は、直前に話者が経験したできごとを描写する際に用いられる。したがって、副詞 maruma 「今」と共起することが可能である。

- (24) maruma kii=nu nar=nu ut-jassu
 今 木=GEN 実=NOM 落ちる-jassu
 今、木の実が落ちた

- (25) 目の前で財布を落とした人に対して
 uva maruma zinfukur utas-jassu=waja
 2.sg 今 財布 落とす-jassu=sf
 あなた、今、財布落としたよ

一方、いくら話者が「直接経験」した「状況の変化」であっても、昨日のことなどには jassu は用いられない⁶⁾。

- (26) *kinoo kii=nu nar=nu ut-jassu
 昨日 木=GEN 実=NOM 落ちる-jassu
 昨日、木の実が落ちた

- (27) *kinoo uva zinfukur utas-jassu=waja
 昨日 2.SG 財布 落とす-jassu=SF
 昨日、あなた財布落としたよ

- (28) *issjuukan+mai maa=nu arak-jassu
 一週間+前 孫=nom 歩く-jassu
 一週間前、孫が歩いた

このようなことから、jassu は直前に話者が経験した状況の変化を描写する形式であると言える。

ここで問題になるのは、「状況の変化そのものが直前に起こった」のか、「(状況の変化は以前にすでに起こっていても) 直前に話者が経験した」のか、ということである。典型的な例の場合、それらは同じタイミングであるが、本稿では jassu は「直前に話者が経験した」ということを述べる形式であると考ええる。それは、以下のような例が可能であるためである。

- (29) usi=nu hazi=nu uraha nar-jassu
 牛=GEN 数=NOM 多く なる-jassu
 牛の数が増えた

- (30) 久しぶりに訪れた場所に、以前あったお店がないのを見て
 macijaa=nu ar-ta=nu naana nar-jassu
 お店=NOM ある-PST=逆接 なく なる-jassu
 お店があったのになくなった

この例は「(島内で飼っている) 牛の数が増えた⁷⁾」「お店がなくなった」という変化に話者が気づいたそのタイミングで使用することができる。そもそも、「牛の数が増える」という変化は急激に起こるわけではなく、「直前」という短い時間にその変化が発生することは不可能である。また、「お店がなくなる」という変化はいつ生じたのかわからない。したがって、上記(29)、(30)が可能である以上、厳密には「状況の変化が直前に起こった」というよりも「直前に話者が経験した」ということを述べる形式である、と考えるのが妥当であろう⁸⁾。

4.2.「話者の直接的経験」

jassuを用いるためには、命題について話者が直接経験していなければならない。

(31) 木の実が落ちるのを目撃して

maruma kii=nu nar=nu ut-jassu
 今 木=GEN 実=NOM 落ちる-jassu
 今、木の実が落ちた

(32) 電灯がつくのを目撃して

maruma dentoo=nu sik-jassu
 今 電灯=NOM つく-jassu
 今、電灯がついた

この例文は、話者の目の前で木の実が落ちた場合に典型的に用いられる。どのような経験のしかたでもかまわないことは後に述べるが、いずれにしろ、話者が直接経験したものでない限りこの文は使えない。したがって、上の(31)を「落ちて地面にある木の実に気がついた」という文脈で用いることや、(32)を「電灯がついているのに気がついた」という文脈で用いることはできない。本節では、jassuが持つ、このような「話者の直接経験」という意味について述べていく。まず、さまざまな「直接経験」の例をあげる。具体的には、視覚だけではなく、聴覚や嗅覚による経験でもかまわない、ということ、そして、自分自身の感覚などについてもjassuを用いて述べるができること、を述べる。その後、「直接経験」ではないために非文法的となる例をあげ、「直接経験」がjassuの意味として不可欠であることを確認する。最後に、mirativeとの関係について述べる。

ではまず、「直接経験」の多様性を示していく。典型的には、(31)や(32)に示したような、視覚による経験で用いられる。しかし、「直接経験」は目撃に限らない。下の例(33)、(34)のとおり聴覚や嗅覚による経験でもかまわない。

(33) ものが落ちる音がして

nuara=nu=du ut-jassu
 なにか=NOM=FOC 落ちる-jassu
 なにかが落ちた

(34) ご飯が炊ける匂いがして

ii=nu ni-jassu
 ご飯=NOM 煮える-jassu
 ご飯が炊けた

さらに、以下の(35)、(36)、(37)のように、自分自身の感覚や行動についてもjassuを用いることができる。

- (35) banaa boor-jassu
 1.SG.TOP 疲れる-jassu
 私は疲れた
- (36) banaa aasun=baaki arak-jassu
 1.SG.TOP 東筋=LMT 歩く-jassu
 私は東筋まで歩いた
- (37) banaa maruma booru kir-jassu
 1.SG.TOP 今 ボール 蹴る-jassu
 私、今ボール蹴った

このように、「直接経験」のなかみはかなり多様であることがわかる。

これに対し、「話者の直接経験」ではないために非文法的となる例は以下のようなものである。まず、他人から得た知識に関してはjassuを用いることはできない。

- (38) 子供が学校に行くのを自分が見た場合
 gakko=ha par-jassu
 学校=ALL 行く-jassu
 学校へ行った
- (39) 子供が学校へ行ったと人から聞いた場合
 #gakko=ha par-jassu

また、非常に蓋然性が高かったり、話者の確信度が高かったりするような命題であっても、直接経験していない場合はjassuは用いられない。もちろん、自分で見た場合には、次の例文を用いることは可能である。

- (40) 午後7時に必ずニュースが始まるということを知っていて、午後7時に
 (ただし、今自分で見てはいない)
 #maruma pazimar-jassu
 今 始まる-jassu
 今、始まった
- (41) なにかが落ちる音がして、音から鍋が落ちたものと思われる
 (ただし、自分で見たわけではないので、なにが落ちたかわからない)
 #maruma nabi=nu ut-jassu
 今 鍋=NOM 落ちる-jassu
 今、鍋が落ちた

上記(41)は、先に示した(33)と状況が似ているものの、違いがある。その違いがjassuの

使用の可否に関係している。(33)においては、話者は「(なにかわからないものの) なにかが落ちた」ことを直接経験している。これに対し、(41)では「鍋が落ちた」ということを話者が直接経験しているわけではない。このような、直接体験性の差がこれらの例の間には存在し、この違いがjassuの使用の文法性にかかわっていることがわかる。

さらに、命題に対する疑いや確信度の低さをあらわす形式をjassuを含む動詞のあとに続けることはできない。kaja「かなあ」は話者の疑いをあらわす終助詞である。また、pazi「だろう」は話者の推測をあらわす形式である。

(42) 孫の野球の試合が石垣島で開始される時間になって

a. *maruma pazimar-jassu=kaja

今 始まる-jassu=SF

今、始まったかなあ

b. maruma pazimar-ta=kaja

今 始まる-PST=SF

今、始まったかなあ

(43) 孫の野球の試合が石垣島で開始される時間になって

a. *maruma pazimar-jassu=pazi

今 始まる-jassu=推測

今、始まっただろう

b. maruma pazimar-ta=pazi

今 始まる-PST=推測

今、始まっただろう

(44) なにかが落ちる音がして、音から鍋が落ちたものと思われる

(ただし、自分で見たわけではないので、なにが落ちたかわからない)

a. *maruma nabi=nu ut-jassu=pazi

今 鍋=NOM 落ちる-jassu=推測

今、鍋が落ちただろう

b. maruma nabi=nu ut-ta=pazi

今 鍋=NOM 落ちる-PST=推測

今、鍋が落ちただろう

このようなことから、jassuの意味として「話者の直接経験」が欠くことのできない要素であること、そして、話者の確信度をあらわすというより話者がその情報をどのように得たかをあらわす形式であることがわかる。以上の分析から、jassuは話者の直接の経験という'source of

information' (Aikhenvald 2004: 3) をあらわすものであることがわかる。したがって、jassu は evidentiality (証拠性。本稿ではエビデンシャリティーとする) にかかわる形式であると言える⁹⁾。

ここで、mirative との関係について述べておく。mirative とは 'new or unexpected information' (DeLancey 2001) の標示のことである。確かに jassu は新しい情報をあらわすことが多いが、必ずしも新しい情報でなくてもよいうえに、予測していたことを述べる場合も用いられる。

(45) 何度も見ている孫が映っているビデオを見て

maruma arak-jassu

今 歩く-jassu

今、歩いた

(46) 落ちそうだと思っていた木の実がついに落ちたのを見て

ut-jassu

落ちる-jassu

落ちた

したがって、jassu は mirative をあらわす形式ではない。

4.3. 「状況の変化」

本節では jassu の意味の「状況の変化」という要素について述べる。「状況の変化」という非常に広い規定をここで用いるのには理由がある。それは、この jassu が意味する「状況の変化」がかなり多様だからである。この点についてまず簡単に説明し、のちに例を示しつつ詳述する。

jassu が用いられる典型的な例は、できごとが終了限界 (工藤 1995: 80) を越える場合である¹⁰⁾。しかし、どのような状況の変化をとらえるかは、実際には文脈によって決定される。さらに、終了限界のない場合や、限界の認定が難しい場合においても、状況の変化があれば、jassu は使用可能である。以下、まず①典型的な終了限界を越える場合、続いて、②開始限界を越える場合について説明する。そののちに、③動詞によってどのような「状況の変化」をあらわすかが決まるわけではなく、文脈に依存することを述べる。続いて、④開始限界も終了限界も認めにくい場合について述べる。最後に⑤「状況の変化」にあてはまらないために非文法的となる例を確認する。

では、まず①終了限界を越える場合を示す。以下の例では、それぞれの終了限界を越えたところである、ということを jassu はあらわす。なお、kis 「着る」、kuras 「殺す」、ni 「煮える」の例をあげる。

(47) kis「着る」

kin=ba kis-jassu
 着物=ACC 着る-jassu
 着物を着た

(48) kuras「殺す」

pisida=ba kuras-jassu
 ヤギ=ACC 殺す-jassu
 ヤギを殺した

(49) ni「煮える」

ii=nu ni-jassu
 ごはん=NOM 煮える-jassu
 ごはんが炊けた

しかし、終了限界を持たない動詞の場合にjassuを用いられないかというと、そうではない。その場合、②開始限界を越えたことをあらわす。vv「降る」¹¹⁾、sum「住む」の例をあげる。

(50) ami=nu vv-jassu

雨=NOM 降る-jassu
 雨が降った（発話時点においても降っている）

(51) 孫などが石垣島に引っ越しをしたのを見届けたときなどに

isanaki=na sum-jassu
 石垣=LOC 住む-jassu
 石垣に住んだ（発話時点においても住んでいる）

「雨が降る」((50))というできごとに関しては、上に示した例のように基本的には雨の降り始めをとらえて、vv-jassu「降る-jassu」を用いる。しかし、黒島ではスコールのような通り雨がよく降るためごく短い時間だけ降った雨をとらえて、vv-jassu「降る-jassu」を用いることも可能である。この場合は、すでに雨は降り終わっている。しかし、梅雨などで長く降った雨の降り終わりをとらえてvv-jassu「降る-jassu」とは言えない。これは、「雨が降る」というできごとに終了限界が備わっていないためであろうと考えられる。

このように、終了限界を持つ動詞の場合、終了限界を越えることを、また、終了限界を持たない動詞の場合は、開始限界を越えることを、典型的にはあらわす。

しかし、実際には、動詞によってどの局面をとらえるかが絶対的に決まるというわけではなく、どのような状況の変化をとらえるか、という点については文脈に依存する(③)。

- (52) 赤ん坊が初めて歩いた場面を見て

arak-jassu

歩く-jassu

歩いた

- (53) 10km 歩くと決めていて10km 歩いたときに

zjuu+kiro arak-jassu

10+km 歩く-jassu

10km 歩いた

上記 (52) と (53) はどちらにも同じ動詞 arak「歩く」が使われているものの、とらえられている状況の変化は異なる。例文 (52) においてとらえられているのは、「赤ん坊が歩かない状況から歩くようになった」という能力の変化である。それに対し、(53) の例文は「10km 歩くという状況が終わった」という状況の変化をとらえている。このように、どのような状況の変化をとらえるか、という点に関しては文脈に依存するのである。

さらに、以下の例のように、④終了限界も開始限界も認めにくいようなできごとにおいても jassu は使用可能である。

- (54) izu=nu pinar-jassu

魚=NOM 減る-jassu

魚が減った

- (55) usi=nu hazi=nu uraha nar-jassu

牛=GEN 数=NOM 多く なる-jassu

牛の数が増えた

なお、jassu は状況の変化だけを述べる形式であるため、変化した結果が現在まで残っている必要はない。

- (56) kisaa kin=ba kis-jassu. airunu maruma paz-jassu

さっき 着物=ACC 着る-jassu しかし 今 脱ぐ-jassu

さっき着物を着た。でも今、脱いだ。

ここまで、jassu が「状況の変化」をあらわす形式であることを述べてきた。ここで、⑤「状況の変化」にあてはまらないがために、非文法的である例を確認しておく。それは、状態をあらわす動詞の場合である。その典型は存在動詞である。いくら「直前に話者が直接経験」したことであっても、存在動詞に jassu を用いることはできない ((57))。さらに、いわゆる存在動詞を用いた「発見」をあらわすことも不可能である ((58))¹²⁾。

(57) 人の存在を述べるときに

*maruma uma=na unu pusu bur-jassu
 今 ここ =LOC その 人 いる -jassu
 今、ここにその人がいる

(58) 探していたものが見つかって

*uma=na ar-jassu
 ここ =LOC ある -jassu
 ここにあった

(59) 探していたものが見つかって

uma=na ar-ta
 ここ =LOC ある -PST
 ここにあった

また、jam「痛む」などの状態動詞にも jassu を後接させることは不可能である。

(60) *amazi=nu jam-jassu
 頭=NOM 痛む -jassu

(61) maruma amazi=nu jam-u
 今 頭=NOM 痛む -NPST
 今、頭が痛い

このように、「直前に話者が直接経験した」ことであっても「状況が変化」していなければ jassu の使用は非文法的になる。(58) においては、「ここにある」というできごとをあらわす述部に jassu が後続しており、「ここにある」というできごと自体ではなにも変化が起こっていない。そのため、jassu を用いることはできない。また、(60) については、黒島方言の jam「痛む」は状態をあらわす動詞であり、「痛み始める」という意味はあらわしえないため、これについても状況の変化はない。したがって、(60) に関しても jassu を用いることは不可能である。

このように、jassu の意味を記述する際に「状況の変化」という点も不可欠であると言える。

以上、本節では、jassu の意味的特徴について議論してきた。その結果、本稿では jassu は「直前に話者が直接経験した状況の変化をあらわす」接尾辞であると考えられる。

5. まとめと今後の課題

本稿においては、黒島方言における接尾辞 jassu について以下のことを述べた ((i) を再掲)。

(i) a. 形態統語的特徴：①義務接尾辞である

②時制接尾辞と共起しない

③主節末、副詞節末には生起するものの、
連体修飾節末には生起しない

b. 意味的特徴 : 直前に話者が直接経験した状況の変化をあらわす

このような特徴を持つことからわかるとおり、この jassu はまさにテンス、アスペクト、エビデンシャルティーが重なる接尾辞である。

琉球語諸方言におけるエビデンシャルティーに関する研究はいくつかの方言においてなされているが（工藤ほか 2007 および Shimoji 2011 による首里方言、Pellard 2010 による大神島方言、Lawrence 2011 による鳩間島方言、Izuyama 2011 による与那国島方言、伊豆山 2011 による石垣島宮良方言、宮古島平良方言など）、まだまだ手つかずの部分が多い。本研究は、黒島方言におけるエビデンシャルティーに関する研究の端緒となろう。

さらに、黒島方言における意味体系のなかにこの jassu の持つ意味を位置づけることも今後の課題としてあげられる。Aikhenvald (2004: 217) によると、1 人称において evidentials が用いられるとき、特殊な意味を帯びることがあるという。このような観点も含め、人称や他のアスペクト形式とのかかわりなど、より詳細に jassu の意味自体も記述していきたい。

注

1) 形態音韻規則により、形態素境界を挟む r と n の連続は nn となる。なお、黒島方言の音節構造については 2 節で述べる。

2) 図 1 の地図はトマ・ペラルル氏の作成による。

3) 伊古と宮里はもともとの住民が全員よそへ移り住んでしまっており、現在の住民は島外からの移住者である。

4) jassu は、jassu、essu、ijassu の 3 つの異形態をとる。黒島方言の動詞は不規則動詞を除くと 2 つの活用タイプ（A 型と B 型）に分けられる。これらのうち、B 型動詞には ijassu が用いられる。A 型動詞のうち、語幹末に母音を持つものには jassu が、子音を持つものには essu が用いられる。以下、それぞれの例を示す。

jassu : A 型動詞で語根末が母音のもの

va-u (食べる) va-jassu (食べた)

essu : A 型動詞で語根末が子音のもの

sak-u (咲く) sak-essu (咲いた)

ijassu : B 型動詞

ku-iru (越える) ku-ijassu (越えた)

なお、本稿の 3 節以降においては、異形態は示していない。

5) (9b) が主節末で用いられる場合と、(9c) が主節末で用いられる場合との違いは、今のところ分かっていない。今後の課題である。

6) しかし、この「直前」にはわりに時間的幅があるようで、「木の実が落ちる」の場合、一時間ほど前であれば

jassuは使用可能である。

icizikan+mai kii=nu nar=nu ut-jassu
 一時間+前 木=GEN 実=NOM 落ちる-jassu
 一時間前、木の実が落ちた

ただし、話者によると、上記の例は言えなくないけれども、わざわざこのようなことは言うことはない、とのことであった。やはりjassuを用いるもっとも自然な場面は、発話時の直前であるようである。

- 7) 黒島は畜産業、特に肉牛の飼育が盛んな島である。そして実際、島内で飼われている牛の数は年々増えているそうである。このような黒島の事情がこの例の背景にはある。
- 8) ただし、たとえば「しばらく家を空けていて帰宅した際に、出発前は木についていた木の实が地面に落ちていた、ということに気がついた」という場面ではjassuは用いられにくいようである。この点については動詞の種類を増やすなどして今後、詳細に記述をしていきたい。
- 9) なお、3.2.で示したとおり、jassuを含む動詞は連体修飾節末に生じえないが、エビデンシャルティー形式が従属節末に生じえない例は、類型論的に見ても、アプハズ語や東ポモ語など、多く存在するようである(Aikhenvald 2004: 253)。
- 10) 工藤(1995: 87)においては、動詞そのものの限界である内的限界と、動詞自身のものではない外的な限界とが別に考えられている。しかし、本稿で扱う現象を分析するに当たっては、これらは区別する必要がないため、すべてできごとの限界として考える。動詞分類などを考慮する際にはこれらを分けて考える必要があるものと思われるが、今後の課題である。なお、Comrie (1976: 44-45)においても telic、atelicについて考える際、動詞のみではなく状況を考慮している。
- 11) 東筋方言においては、動詞「降る」の語根はvvであるが、保里方言においてはvuのようである。本稿においては東筋方言の語形をあげておく。
- 12) 存在動詞を用いたいいわゆる「発見」についてjassuが用いられないのであって、他の動作をあらわす動詞の場合はjassuを用いて「発見」をあらわすことは可能である。

basu=nu ki-jassu=waja
 バス=NOM 来る-jassu=SF
 バスが来た

参考文献

- 伊豆山敦子 (2011) 『琉球のことばと人——エヴィデンシャルティーへの道——』 真珠書院
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテクスト—現代日本語の時間の表現』 ひつじ書房
- 工藤真由美、高江洲頼子、八亀裕美 (2007) 「首里方言のアスペクト、テンス、エヴィデンシャルティー」『大阪大学大学院文学研究科紀要』 47.
- ローレンス・ウエイン (2000) 「八重山方言の区画について」 石垣繁編『宮良當壮記念論集』 ひるぎ社
- Aikhenvald, Y. Alexandra. (2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- Comrie, Bernard. (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- DeLancey, Scott. (2001) The mirative and evidentiality. *Journal of Pragmatics* 33: 369-382.
- Izuyama, Atsuko. (2011) Yonaguni. In N. Tranter (ed.) *The languages of Japan and Korea*. London and New York: Routledge. 412-457.
- Lawrence, P. Wayne. (2011) Southern Ryukyuan. In N. Tranter (ed.) *The languages of Japan and Korea*.

London and New York: Routledge, 381-411.

Pellard, Thoms. (2010) Ōgami. In M. Shimoji and Pellard, T. (eds.) *An introduction to Ryukyuan language*.

Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 113-166.

Shimoji, Michinori. (2011) Northern Ryukyuan. In N. Tranter (ed.) *The languages of Japan and Korea*.

London and New York: Routledge, 351-380.

略号一覧

1	1人称	INF	不定形	PASS	受け身
2	2人称	IMP	命令	PST	過去
ABL	奪格	NOM	主格	SF	終助詞
ADN	連体	NPST	非過去	SG	単数
ALL	向格	LMT	限定格	TOP	主題
IND	直説	LOC	場所格		

(博士後期課程学生)

(2014年8月19日受付)

(2014年10月6日修正版受付)

(2014年10月22日掲載決定)